



名取春仙が描く 鎌倉武士たち展

令和4年7月23日(土)～9月25日(日)



南アルプス市立美術館
MINAMI ALPS CITY MUSEUM OF ART

☆ ^{いま わだい} ^{かまくら} ^{じだい} ^{かぶき} ^{えんもく} 今話題の鎌倉時代。歌舞伎の演目になっています。どのよ
^{はなし} ^{しょうかい} うなお話なのか、ここでは2つ紹介します。

特別公開 ^{とくべつ こうかい} ^{かんとう} ^{だいしんさい} ^{えまき} 関東大震災絵巻

^{ねん} ^{かんとう} ^{ちほう} ^{ちゆうしん} ^{おお} ^{じしん} ^お 1923年、関東地方を中心に大きな地震が起こります。^{かんとうだいしんさい} ^{じっさい} ^{けいけん} ^な 関東大震災です。実際に経験した名
^{りしゆんせん} ^{とうじ} ^{きろく} ^{かいが} ^{まきもの} ^{かん} ^{えが} ^{とど} ^え ^{とお} ^{とうじ} ^{ようす} 取春仙が、当時の記録絵画を7mもの巻物2巻で描き留めています。絵を通して当時の様子
^{そうぞう} を想像してください。

^{すけ} ^{ろく} ^{ゆかりの} ^え ^ど ^{さくら} 助六縁江戸桜

舞台は、吉原(よしわら)遊郭(ゆうかく)。花魁(おいらん)「揚巻(あげまき)」の恋人「助六(すけろく)」は曾我五郎時致(そがのごろうときむね)という武士で、源氏の宝刀・友(とも)切(きり)丸(まる)を探(たず)ねるために吉原(よしわら)に出入(しゆり)りしています。

吉原(よしわら)で豪遊(ごうゆう)する「髭(ひげ)の意休(いきゆう)」という老人(らうじん)が、この刀(やいば)を持(も)っていることを聞(き)き出し、奪(うば)い返(かへ)します。

粋(いき)でいなせで喧嘩(けんか)も強(つよ)い助六(すけろく)は、江戸っ子(えどっこ)の理想像(りゆうきやう)を体現(ていげん)したようなスーパースーパーヒーロー。気風(きふう)がきつぷのいい揚巻(あげまき)は理想(りゆうきやう)の恋人(こいびと)。ただ(ただ)の憎まれ役(にくまれやく)でない大人(おとな)の風格(ふうりく)を感じ(かん)させる意休(いきゆう)や、おっとりしているが、お茶目(ちやめ)な一面(いちめん)も持(も)つ白酒売(しろざけうり)(兄十郎(じゅうじやう))など個性(こせう)的なキャラ(きゃら)が登場(ていじやう)します。

助六(すけろく)のかっこよさ(かっこよさ)や舞台(ぶたい)の美しさ(うつくしさ)を楽(たの)しむ、江戸っ子(えどっこ)の美意識(みいしぎ)の集大成(しゅうたいせい)ともいえる作品(さくひん)です。

一口メモ！

普段(ふだん)よく目(め)にする助六(すけろく)寿司(すし)は、この演目(えんもく)からつけられ(つけられ)と言(い)われています。助六(すけろく)寿司(すし)の「いなり寿司(いなりすし)」は油揚げ(あぶらあげ)の「揚(あげ)」で、「巻寿司(まきすし)」の「巻(まき)」と合(あ)わせて、助六(すけろく)の恋人(こいびと)「揚巻(あげまき)」となること(こと)から、江戸っ子(えどっこ)の洒落(しやれ)で「助六(すけろく)寿司(すし)」と呼ば(よ)ばれるよう(よう)になった(なっ)たそうです。

粋(いき)でいなせって、かっこよくって流行(りやう)の先端(せんぽん)をいっ(い)ているイケメン(イケメン)のこと(こと)だよ。今(いま)のアイドル(アイドル)といっ(い)る

紫(むらさき)のはちまき、黄色(きいろ)いたび、黒(くろ)い着物(きもの)から赤(あか)のじゅばん(じゅばん)をちらり(ちらり)と見(み)せて、さっそう(さっそう)と歩(あ)く姿(すがた)が拍手(はくで)かっさい！助六(すけろく)かさをパツ(ぱつ)と広(ひろ)げみえを切(き)ります。



《十五代目市村羽左衛門 助六》



（尾上菊五郎 義経勧進帳）1940年

（松本幸四郎 弁慶勧進帳）1940年

（市村羽左衛門 富樫勧進帳）1940年

勧進帳(かんじんちょう)

兄である源頼朝(みなもとのよりとも)と不和になった源義経(みなもとのよしつね)は、山伏(やまぶし)に変装して、奥州(おうしゅう)平泉(ひらいずみ)の藤原(ふじわらの)秀衡(ひでひら)のもとへ落ちのびようとしています。

武蔵坊(むさしぼう)弁慶(べんけい)の他、四人の部下をつれて、義経一行がさしかかったのは、義経を捕らえるために設けられた安宅(あたか)の関(せき)。

関守の富樫(とがし)左(さ)衛門(えもん)は一行を疑い、山伏なら持っているはずの、東大寺再建のための寄付を募った巻物である勧進帳を読むように命じます。

白紙の巻物をあたかも勧進帳であるかのように読み上げる弁慶ですが、目ざとい番卒(ばんそつ)に荷物持ちの強力(ごうりき)が義経に似ていると気づかれてしまいます。この危機を脱するため弁慶は主人である義経を金剛(こんごう)杖(づえ)で打ちすえます。富樫は義経一行だと見破りつつも、弁慶の忠義(ちゅうぎ)に心を打たれ通行を許可します。

富樫が去った後、涙ながらに無礼をわびる弁慶に、義経は彼の機転をほめます。そこに富樫が現れ、無礼のおわびに酒をふるまい、これを快く受ける弁慶。義経一行を先に逃がして後、富樫に感謝(かんしゃ)して後を追うのでした。

この見どころは、なんとといっても、白紙の巻物を読み上げる弁慶と、巻物をのぞき見ようとする富樫との攻防と、正体を暴こうと厳しく問う富樫とそれに答える弁慶の激しい掛け合いです。弁慶と富樫とのやり取りは一瞬(いつしゆん)たりとも気をぬけない気迫(きはく)に満ちています。

また、主君に手をあげてまでこの場を乗り越えようとする弁慶と、義経一行とわかっていながら捕らえられない富樫の葛藤、(かつとう)「飛び六方」(六つの方角、天・地・東・西・南・北へ手足を動かして、飛ぶようなステップで花道を駆け抜けるもの)と呼ばれる引っ込みまで見どころの多い、歌舞伎(かぶき)を代表する作品です。

勧進帳が白紙であることをかくそうとして中を見せない弁慶と、のぞいて偽物であると見抜きたい富樫のやり取りが見どころです。



南アルプス市立美術館
MINAMI ALPS CITY MUSEUM OF ART

〒400-0306
山梨県南アルプス市小笠原1281
TEL 055-282-6600 FAX 055-282-6601